

平成26年度リージョナルシアター事業
Regional Theatre Projects

事業報告書



INDEX-目次-

はじめに		P 3
事業概要		P 4
派遣アーティストプロフィール		P 6
事業の流れ		P 7
研修プログラム		P 8
参加ホールプログラム一覧		P 9
事業実施		
八王子市	実施データ	P 10
	派遣アーティスト 多田淳之介	P 12
小田原市	実施データ	P 14
	派遣アーティスト 内藤裕敬	P 16
対談	内藤裕敬×多田淳之介	P 18
事業実施		
茅野市	実施データ	P 22
	派遣アーティスト 岩崎正裕	P 24
豊岡市	実施データ	P 26
	派遣アーティスト 田上 豊	P 28
対談	岩崎正裕×田上 豊	P 30
アウトリーチ実施校データ		P 34

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携のもと、全国の地方公共団体や関連の公益法人などが実施する文化・芸術活動に対し支援を行なうほか、財団の自主事業として、研修交流事業、公立文化施設活性化推進、調査研究等の事業に取り組んでいます。

本事業は、演劇の表現者(演出家)を公共ホールに最大3回派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施する事業としてリニューアルし、平成25年度はモデル事業として、3団体で実施し、本年度は、八王子市芸術文化会館、小田原市民会館、茅野市民館、豊岡市民プラザの4団体で実施しました。

各参加ホールのプログラムは、地域のニーズに合わせて自由に企画され、小学校へ出向き授業時間で行われたアウトリーチ、中学校・高校の演劇部でのワークショップ、公募で参加した方々が戯曲創作から発表までを行う演劇体験、更には劇場職員と教職員がいっしょになってワークショッププログラムをつくる過程をサポートするなど、多彩なプログラムを実施しました。

この報告書は、「平成26年度リージョナルシアター事業」において実施した事業内容をまとめたものです。地域の公立文化施設の職員や地方公共団体の芸術文化担当者が、演劇の手法を活用したワークショップを企画される際や、公共ホールの担当者と地域の表現者の共同作業を行う際の参考としていただければ幸いです。

平成27年3月
一般財団法人 地域創造

事業概要

1 趣旨

一般財団法人地域創造は、公共ホールの活性化と創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホールスタッフ等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、演劇の表現者(演出家)を公共ホールに派遣し演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

2 対象団体

①地方公共団体

②地方自治法第244条の2第3項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体。

③地域における芸術文化活動の振興に資することを目的として設立された、公益法人制度改革三法※による特例民法法人、公益財団法人等((2)を除く。)のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これらに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの。

※「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」、「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」及び「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」

3 事業内容

演劇の表現者(演出家、以下派遣アーティスト)を公共ホールに派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施します。派遣アーティストは各地域最大3回(研修会を除く)まで派遣します。

(1)プログラムの実施時間

午前・午後の時間帯に計360分のプログラム、夜間(常識的な開催時刻)の時間帯に計480分のプログラムを実施します。日数と時間の配分は参加団体が提案します。

(2)派遣回数

最大3回の派遣を行います(研修会を除く)。1回目は打合せや内部の研修、アウトリーチ先の下見に充ててください。

残り2回でプログラムを実施しますが、連続した日程にするなど派遣回数を計2回とする場合は、2回目が原則5泊6日になります。

【実施時間の考え方】

・プログラムの実施時間

午前・午後の360分、夜間(常識的な開催時刻)の480分のワークショップの時間を最小限とし、時間の配分や派遣回数は、参加団体の企画をもとに表現者と微調整します。この時間数や日数を超えるプログラムの場合は、別途謝金や経費が発生し、参加団体の負担となります。

・学校でのアウトリーチについて

学校(小・中・高校等)の授業枠でアウトリーチを実施する場合、1コマの時間は、小学校では45分×2時限(90分)、中学・高校等では50分×2時限(100分)を最小限とします。また、1コマの対象人数は1クラス約30人を目標にしています。

4 支援措置

(1) 一般財団法人地域創造が負担する経費

① 派遣アーティストにかかる経費

派遣アーティストに係る研修会及び、下見、プログラム実施にかかる派遣3回分までの経費(謝金、交通費、宿泊費等)は地域創造が負担します。学校でのアウトリーチを実施する場合のアシスタント2名分の経費(謝金、交通費、宿泊費等)は地域創造が負担します。

(2) 参加団体が負担する経費

① 研修会参加にかかる経費

ホール担当者の研修会の旅費(交通費、宿泊費等)は、参加団体の負担になります。

② プログラム実施にかかる経費

プログラムを実施する際の経費(会場使用料、機材使用料、消耗品等)は、参加団体の負担となります。

③ その他

規定の時間や日数を超える企画の場合に発生する別途謝金や旅費等の経費は、参加団体の負担となります。参加申込書及び実施計画書を考慮の上、決定します。なお、派遣アーティストの指定はできません。

5 プログラムについて

プロの演出家が地域で演劇のワークショップを行うことで、各地域の課題に取り組むことが可能になります。

演劇の手法を使った学校でのアウトリーチ、地元の演劇人や学校の先生、行政職員を対象にした研修会、地元の若い演劇人が派遣アーティストのアシスタントとしてワークショップに関わりステップアップを試みる、子どもたちを対象に演劇に触れる時間を持つなど、地域独自の様々なプログラムを自由に作成していただけます。

派遣アーティスト プロフィール

派遣アーティストは派遣先の地域でワークショップを行う講師を務める他、公共ホールの企画するプログラムの内容について、ホール担当者と共に企画検討を行うコーディネーターの役割も兼ねます。

内藤 裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長）



1959年栃木県生まれ。南河内万歳一座・座長。高校の時に状況劇場『蛇姫様』（作・演出／唐十郎）を見て芝居の道へ。1979年、大阪芸術大学（舞台芸術学科）に入学。4年間、秋浜悟史教授（劇作家・演出家）に師事。その間、「リアリズムにおけるインチキの仕方」を追求。1980年、南河内万歳一座を『蛇姫様』で旗揚げ。以降、全作品の作・演出を手がける。

現代的演劇の基礎を土台とし、常に現代を俯瞰した作品には定評があり、兵庫県立ピッコロ劇団や世界的ピアニスト・仲道郁代との共同企画など、劇団外での作・演出も多数。2000年読売演劇大賞・優秀演出家賞受賞。著作に『内藤裕敬処女戯曲集劇風録其之壱』『青木さん家の奥さん』がある。

岩崎 正裕（劇作家・演出家、劇団太陽族主宰）



1963年三重県鈴鹿市生まれ。1982年大阪芸術大学舞台芸術学科入学。同年「劇団大阪太陽族」（現：劇団太陽族）を旗揚げ。1994年「レ・ボリューション」で第1回OMS戯曲賞佳作、1997年「ここからは遠い国」で第4回OMS戯曲賞大賞を受賞。その他1997年大阪市さくやこの花賞、1999年兵庫県芸術奨励賞、2000年大阪府舞台芸術奨励賞などを受賞。各地でプロデュース公演・市民参加舞台の作・演出を手掛け、舞台芸術普及活動を広く展開している。

現在、伊丹市立演劇ホールアイホール劇場ディレクター、NPO法人大阪現代舞台芸術協会理事長、大阪芸術大学短期大学講師など。

多田 淳之介（演出家・俳優、東京デスロック主宰）



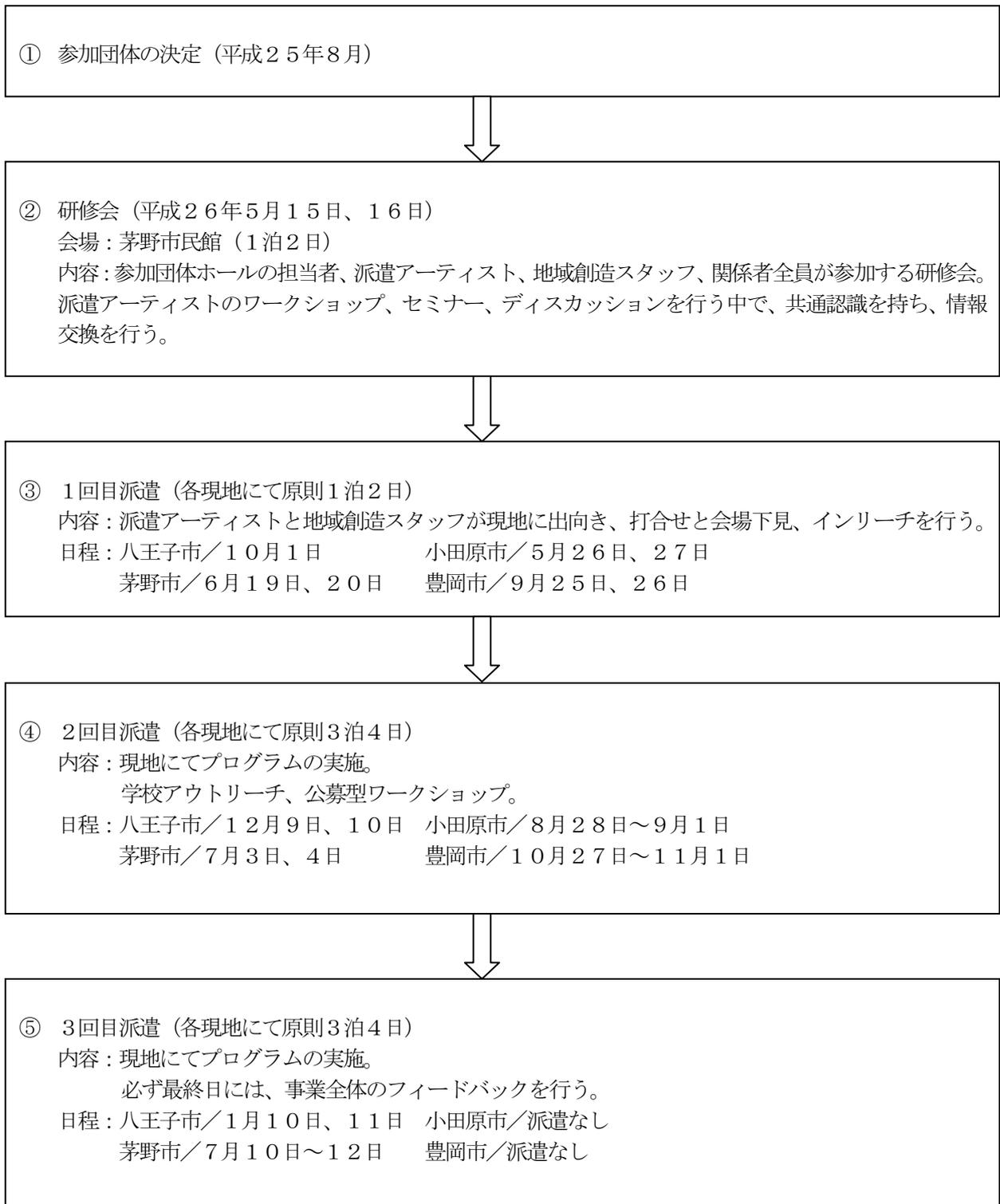
1976年生まれ、千葉県柏市出身。演出家、俳優。東京デスロック主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。青年団演出部。俳優の身体、観客、劇場空間を含めた、「現前＝現象」をフォーカスした演出が特徴。古典から現代劇、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。「演劇LOVE」を公言し、富士見市を中心に、他地域、教育機関でのアウトリーチ活動、創作活動も積極的に行い、韓国、フランスでの公演、共同製作など国内外問わず活動する。2010年4月に演劇部門では国内歴代最年少で公共文化施設の芸術監督に就任。おもな演出作品に『ロミオとジュリエット』『その人を知らず』『あなた自身のためのレッスン』『LOVE』『再／生』など。

田上 豊（劇作家・演出家、田上パル主宰）



1983年熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。在学中に劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、疾風怒濤の勢いと、遊び心満載の舞台は「体育会系演劇」とも評される。劇団外でも、高校生、大学生とのクリエイション、市民劇団や公共ホール事業への書き下ろしなど、プロアマ問わず、様々な形で活動を展開。演劇部の嘱託顧問や表現科目「演劇」の授業を持つなど、教育現場での経験も持つ。大学在学中にワークショップデザインに触れ、その後、創作型から体験型、育成講座まで幅広くワークショップを行う。現在、富士見市民文化会館キラリふじみアソシエイトアーティスト、青年団演出部所属。

事業の流れ



* 2回目派遣が4日間連続のプログラム (原則5泊6日) の場合は、3回目派遣はありません。

研修プログラム

	平成26年5月15日(木)	平成26年5月16日(金)
10:00		10:00～12:00 ディスカッション 前日の演劇ワークショップ及び公開セミナーについての振り返りと各団体の企画発表及びワークショッププログラムについてのディスカッション。
11:00		
12:00		12:00～13:00 昼食
13:00		13:00～14:30 企画内容の検討 各参加団体に分かれて、派遣アーティストとそれぞれの企画内容について協議。
14:00	14:00～15:00 オリエンテーション・挨拶・関係者紹介 事業の流れ、スケジュールの説明	14:30～14:50 事務連絡
15:00	15:00～15:15 休憩	
16:00	15:15～17:15 演劇ワークショップ 講師：内藤裕敬 参加ホール担当者、関係者が、演劇ワークショップを体験する。絵を見てイメージを伝える。音楽と絵を使ってイメージを言葉にし、想像力を豊かにする。その後、参加者全員でフィードバックを実施。	
17:00	17:15～17:45 休憩	
18:00	17:45～19:45 ※公開セミナー「地域との連携」 パネリスト：内藤裕敬、岩崎正裕、多田淳之介、田上豊 進行：津村卓 パネリストに地域と連携した事業、市民参加劇の創作、地元表現者の育成や協働した事例を紹介。	
19:00		
20:00	20:00～ 交流会(自由参加、会費制)	

※公開セミナーの参加者数 事業参加団体8名、茅野市関係者15名、その他17名 計40名

参加ホールプログラム一覧

●茅野市（長野県）

1回目派遣		2回目派遣		3回目派遣			
6月19日（木）～20日（金）		7月3日（木）～4日（金）		7月10日（木）～12日（土）			
打合せ 学校下見 会場下見等	午前	永明小学校での アウトリーチ①	永明小学校での アウトリーチ②、 ③	米沢小学校での アウトリーチ①、 ②	180分	事業全体の フィードバック	事業全体の フィードバック
	午後		180分				
	19時～21時	一般対象のWS①	一般対象のWS②	一般対象のWS③	一般対象のWS④	120分	
		90分		90分			
		120分	120分	120分	120分		

●小田原市（神奈川県）

1回目派遣		2回目派遣				
5月26日（月）		8月28日（木）～9月1日（土）				
打合せ 会場下見 インリーチ等	午前	事業全体の フィードバック				事業全体の フィードバック
	午後	小学生低学年 公募型WS	小学生高学年 公募型WS	中高生演劇部 公募型WS①	中高生演劇部 公募型WS②	
	19時～21時	一般対象のWS①	一般対象のWS②	一般対象のWS③	一般対象のWS④	
		90分	90分	90分	90分	
		120分	120分	120分	120分	

※一般対象のWS③、④は18時～20時

●豊岡市（兵庫県）

1回目派遣		2回目派遣				
9月25日（木）～26日（木）		10月27日（月）～11月1日（土）				
打合せ 学校下見 会場下見等	午前	資母小学校での アウトリーチ①	資母小学校での アウトリーチ②	豊岡小学校での アウトリーチ②	事業全体の フィードバック	
	午後	打合せ	豊岡小学校での アウトリーチ①	豊岡小学校での 合同発表会		
	19時～21時	一般対象のWS①	一般対象のWS②	一般対象のWS③	一般対象のWS④	
		90分	90分	90分		
		120分	120分	120分	120分	

●八王子市（東京都）

1回目派遣		2回目派遣		3回目派遣	
10月1日（水）		12月9日（火）～10日（水）		1月10日（土）～11日（日）	
打合せ 学校下見 会場下見等	午前	拓真高校演劇部対 象のWS	南大沢コミュニ ティオペラ合唱団 対象のWS	市民劇団シアター プロジェクトと振 り返り	事業全体の フィードバック
	午後		120分		
	19時～21時	一般対象のWS①	一般対象のWS②	市民劇団シアター プロジェクト及び 公募参加者対象の WS	300分
		180分	120分		

*要綱の規定の時間や日数を超える企画の場合に発生する別途謝金や旅費等の経費は、参加団体の負担となる。

●八王子市(東京都)

参加館 実施データ

実施団体	(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団
実施ホール	八王子市芸術文化会館
担当者	土方亨、木村愛美
派遣アーティスト	多田淳之介
アシスタント	佐藤誠、大川潤子(2回目派遣)
<p>1回目派遣の内容：参加団体との打合せ及び会場下見</p> <p>10月1日(水) 12:00~20:00 八王子市立南大沢中学校、東京都立八王子拓真高校、当財団主催南大沢コミュニティオペラ合唱団、八王子市民劇団シアタープロジェクト</p>	
<p>2回目派遣の内容</p> <p>12月9日(火) 15:00~18:00 都立八王子拓真高校演劇部 WS (於 同校視聴覚室) 参加者：生徒11名</p> <p>12月10日(水) 10:00~12:00 オペラ合唱団 WS (於 南大沢文化会館リハーサル室) 参加者：オペラ合唱団41名</p> <p>12月10日(水) 16:00~18:00 南大沢中演劇部 WS (同校教室) 参加者：生徒11名</p>	
<p>3回目派遣の内容</p> <p>1月10日(土) 13:00~18:00 シアプロ公募 WS (於 八王子市芸術文化会館練習室1) 参加者：シアプロメンバー及び公募参加者23名</p> <p>1月11日(日) 10:00~12:00 シアプロ WS (於 八王子市芸術文化会館練習室1) 参加者：シアプロメンバー 5名 内容 前日 WS の振り返り</p> <p>1月11日(日) 13:00~14:00 事業全体振り返り 参加者：財団4名</p>	

1~3回目派遣のスケジュール

	1回目 10月1日(水)	2回目 12月9日(火)	12月10日(水)	3回目 1月10日(土)	1月11日(日)
9:00					
10:00			オペラ合唱団 WS		シアプロ WS・振り返り
11:00					
12:00					
13:00	南大沢中打合せ・会場下見			シアプロ 公募 WS	事業全体の振り返り
14:00					
15:00	拓真高校打合せ・会場下見	拓真高校 WS			
16:00			南大沢中 WS		
17:00	打合せ				
18:00	(いちようホール)				
19:00	シアプロ打合せ				

●この事業への参加理由

- ・音楽系（市民オペラ・合唱）や伝統文化（能・八王子車人形・篠笛）系に比べて演劇系の自主事業の実績が十分でないため、この事業を通じて、地域住民や子供たちに演劇の楽しさを知っていただき、演劇事業のニーズの掘り起こしを図り、事業企画の足掛かりとするとともに、地域の課題の共有や解決及び芸術文化振興に寄与するため。
- ・地域交流プログラム（アウトリーチ）先の選定やコーディネートを通じて、幅広い団体・対象へ財団がアプローチするノウハウを身につけ、且つ、各団体との今後の協力体制を構築していくため。
- ・当財団の演劇ワークショップにより誕生した市民劇団「八王子シアタープロジェクト（創立5周年）」に対するサポートの一環として、技術的なステップアップや新規劇団員加入の機会として活用するため。

●今回のプログラムの目的と成果

以上の参加理由を本事業全体の大きな目的としながら、第1回派遣で伺った各参加団体の現状と今後の目標が達成できることを念頭に置き、ワークショップを実施しました。

各団体の特色は様々でしたが、各団体に合わせたプログラムを多田氏にご提案頂き、財団と各団体と3者で慎重に検討できたため、充実したプログラムのワークショップを実施することができ、「大変よい機会でした」とのご意見を参加者より頂きました。

また、財団にとっても、これまで演劇系の事業は不十分であったため、本事業を通じて、今後、地域住民に演劇の楽しさを広め、地域とのつながりをつくりながら実施する事業を企画するための布石となりました。

●この事業全体を振り返って

派遣アーティストの多田氏には、特色が様々な各団体に合わせてプログラムを構成して頂き、充実した内容のワークショップとなり、参加者から大変好評でした。

財団としても演劇関連事業が少ないなか、本格的な演技ワークショップを実施でき、貴重な時間となりました。また、各団体との交渉スキルを磨くことや、各団体との協力体制を築くといったコミュニケーションの面での、当初の事業実施目的も、多田氏と地域創造の担当スタッフの方の的確なアドバイス等により、達成することができました。

当財団ワークショップから誕生し現在まで継続して活動している八王子市民劇団シアタープロジェクトへのサポートや今後の課題の共有の大きなきっかけとなりました。

●今後の事業展開

今回のワークショップを活かし、これまで実績の少なかった演劇に関する事業の充実を視野に入れ、今後も多彩なジャンルの芸術文化の鑑賞・体験機会を市民の皆様に提供し、多くの入場者・参加者が気軽に来館できるホールづくり、地域の課題を芸術文化を通して、ともに解決していく事業づくりを目指してまいります。

派遣アーティスト 多田淳之介

■八王子市について

人口約58万人、「地域」と一言で括るには、なかなか難しい大都市八王子市。そこで何ができるのかは全く未知数でした。まあこの事業は地域側からの企画ありきなで自分としてはそれでいいのですが。そして最初の打ち合わせ。八王子の財団からは、劇場の活動から生まれた地域劇団「八王子シアタープロジェクト(以下シアプロ)」の技術向上、学校アウトリーチでは演劇部の技術向上という提案がありました。シアプロに関しては、当の本人達がどうしたいのかが見えないし、財団としても今後彼らにどういう方向に進んで欲しいのかビジョンが見えない。仮に技術向上を目指すとして、その先に何を見ているのか。財団とシアプロで一度その辺りのコンセンサスを取ってほしいと提案しました。学校に関しても、地域の劇場として子供たちに何のために何を提供するのか、再考をお願いしました。財団の方にも理解していただけるとても充実した打ち合わせだったと思います。その後、担当者が異動になるという一件もあり、シアプロに関しては彼らも含めて打ち合わせをすることになりました。彼らと話したところ、技術的には「演出」について学びたい、活動自体は充実している、作品のクオリティも高く、正直このままでもいいんじゃないかと思いました。ただ仲間をもっと増やしたいということもあり、ここまで自立して活動できているのなら、今後はシアプロによる普及活動というビジョンが見えてきました。結果、参加者はシアプロと一般公募のミックス、新メンバー加入を見込んだ体験ワークショップの要素と、演出についての要素も入れたワークショップを実施することになりました。こういう事業はここまでが、アーティストと実施側とのビジョンの共有が経験的に一番重要だと思っています。最初は食い違っても、そこを急いだり、軽視すると良い結果にはなりません。実際のプログラムは5時間の長丁場、初心者も多かったので、演劇を作る楽しさ、他者との協働などをゆっくり進め、最後は地域CMを作りました。CMにしたのは、地域を考えるのはもちろん「そこに行きたくさせる」という効果を作ることが「演出」だからです。翌日はシアプロのみで更に演出についてのワークショップも実施しました。財団との振り返りでも話しましたが、今後は作品作りと並行してシアプロ主催での演劇体験ワークショップや学校アウトリーチも実施できれば、彼らの活動の幅も広がる上に普及活動にもなり、劇場とつながる地域劇団としてのモデルケースにもなりうるでしょう。人口も多く文化活動のレベルも高い地域では、より高みを目指して他地域の希望になって欲しいものです。財団からも新たなビジョンが見えたという話も聞いて、実施まで決してスムーズではありませんでしたが急がず進められたことが良い結果になりました。他にも市民オペラ合唱団、南大沢中学校演劇部、拓真高校演劇部へのワークショップを実施。学校はどちらも演劇部で一般生徒の参加がなかったのが残念ですが、両校ともに顧問の先生が熱心で生徒への思いがあったのが印象的でした。特に拓真高校は昼、夕、夜の三部制の学校で、生徒は変則的に通学しています。学校打ち合わせでは、自分の意思を伝えるのが苦手、自らをコミュ障(コミュニケーション障害)と呼ぶ、成功体験が足りないなど、先生が心を開いて現状の課題を話してくれたことが良かったです。多くの学校は外部への警戒が強く、仲が良いクラスと聞いていても学級崩壊している事もありますから。拓真高校では非言語コミュニケーションのワークショップで言葉以外にも何か伝わることを楽しんでもらったのが非常に良かったです。ただ実施した両校で、ワークショップ途中に三者面談が入ったり、テストに行かなくてはいけなかったり、その辺りの調整は今後の課題でしょう。今後は特に拓真高校でのアウトリーチは継続して欲しいです。どこであろうが困っている人を掬い上げるための事業ですから。まあ今は、大抵の日本人が困っているのですが、だから必要なことなのですが。



■公募型ワークショップの流れ

1月10日(土)13:00~18:00 いちようホール練習室1

対象者:シアタープロジェクト7人、一般公募16人 計23人

①講師の自己紹介

コミュニケーションと演劇の話。

②コミュニケーションゲーム

バリエーションにとんだジャンケン。

好きな色同志で集まる。好きな動物同志で集まる。八王子と言えば何かをイメージして同じ仲間を見つける。

休憩

③歩きながら、空間を意識する指示を講師が出していく。

④ゲームの続き。

イスに座って円になる。山手線ゲームで自己紹介。フルーツバスケットのゲーム。

⑤コミュニケーションゲーム

2チームにわかれて、1人ずつ1~12の番号を決める。番号が低いほど、地味で大人しい趣味。番号が大きくなるほど活発で大きな趣味をそれぞれ決める。同時にスタートをして会話をしながら相手チームの同じ番号の人を見つける。

2回目は、番号が低いほど破局に近い。番号が大きいほど恋愛中(結婚前)という設定。

休憩

⑥ジェスチャーゲーム

3チームにわかれて縦1列になり、テーマを渡してジェスチャーのみで最後の人が当てられるか。

「浦島太郎」「桃太郎」「かぐや姫」など。

⑦静止画をつくる

4チームにわかれて、出されたテーマを創作。静止画の状態を見て他のグループに当ててもらおう。

「音楽室」「美術室」「保健室」「理科室」など。

休憩

⑧八王子の好きなスポットのCMをつくる

各自、八王子で好きな場所を挙げてもらう。多数決で24の中から4に絞る。

「浅川沿い」「高尾山」「甲州街道の歩道橋から見るイチョウ並木」「居酒屋モータウン」

4チームにわかれて、この場所を訪れるとどんな気持ちになるか(セールスポイント)を考え、キャッチコピーをつくる。

「登場人物」を設定。(楽しんでいない人、場所の良さを理解していない人もつくる)ここが説明の部分。次に「出来事」をつくる。「変化」最終的な結果を見せる。キャッチコピーも使う。

⑨4つのCMの振り返り

各チームの良かったところなどの総評。作品はコミュニケーションしないとつけれない。全員が良いものをつくる意識がないとできない。伝えたいものをどう伝えるかを考えるのが演劇。

●小田原市(神奈川県)

参加館 実施データ

実施団体	小田原市
実施ホール	小田原市民会館
担当者	富士原直也
派遣アーティスト	内藤裕敬
アシスタント	緑慎一郎、大島寛史(2回目派遣)
<p>1回目派遣の内容 【会場】おだわら国際交流ラウンジ 【参加者】10名【時間】18:00~20:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ・14:30~ 2回目派遣の打ち合わせ(スケジュール、カリキュラム、広報等について) ・15:30~ 会場、および小田原中心市街地 視察 ・18:00~20:00 プレワークショップ「内藤裕敬さんと演劇を語る会」 ・20:30~ 懇親会 	
<p>2回目派遣の内容 演劇ワークショップ「見えないものを見るチカラ」</p> <p>【会場】小田原市民会館小ホール【参加者】小学生23名/中高生10名/大人29名</p> <p>【時間】小学生・中高生14:30~16:00/大人(木・金)19:00~21:00(土)18:00~20:00(日)18:00~20:00</p> <p>【小学生向け】音楽を聴く・絵を見ることを通して、想像力を働かせ、自分で表現することを実践する</p> <p>【中高生向け】発声練習・身体訓練を行い、台詞を発するまでに行う心と体の作り方や、表現するために必要な想像力の使い方を学ぶ</p> <p>【大人向け】与えられたひとつのト書きから、言葉や関係性を想像力を使って膨らませ「遊ぶ」ことで、物語を作る。共通のシチュエーションを全員が共有し、その場での劇を作る。</p>	

1~2回目派遣のスケジュール

	1回目 5月26日(月)	2回目 8月28日(木)	8月29日(金)	8月30日(土)	8月31日(日)	9月1日(月)
9:00						
10:00						事業全体の フィードバック 10:00~11:30
11:00						
12:00						
13:00						
14:00	打合せ 14:30~ 市内視察 15:30~	WS小学生 低学年 14:30~16:00	WS小学生 高学年 14:30~16:00	WS中高生 1回目 14:30~16:00	WS中高生 2回目 14:30~16:00	
15:00						
16:00						
17:00						
18:00	プレWS 18:00~20:00			WS大人 3回目 18:00~20:00	WS大人 4回目 18:00~20:00	
19:00		WS大人 1回目 19:00~21:00	WS大人 2回目 19:00~21:00			
20:00						
21:00	懇親会 20:30~					

●この事業への参加理由

小田原市では、平成 29 年オープンの芸術文化創造センターの開館を見据えた「文化の担い手育成事業」として、平成 23 年度より、学校アウトリーチなどの育成事業や、中間支援人材の育成と経験蓄積・人材交流を目的としたアートマネジメント系のワークショップ、また特に子どもを対象としたアートワークショップ(美術・ダンス・ミュージカル・伝統芸能など)を実施している。

本事業への参加によって、アマチュア演劇人だけでなく演劇に興味を持つライトな層から、はじめるきっかけを探していた初心者までを取り込み、新たな地域演劇文化のコミュニティを創造することを目的とした。

また、芸術文化創造センターの事業のひとつとして構想される市民参加型による舞台芸術事業(演劇・ミュージカル・オペラ)への布石として、プロの演出家や演劇団体とのつながりを持ち、来るべき開館事業に備えて、市民に対して舞台芸術活動の意義を周知することが、もうひとつの目的である。

●今回のプログラムの目的と成果

1) 目的

想像力に訴えかける舞台制作を行う南河内万歳一座の内藤裕敬さんを講師としてお迎えし、誰もが持っている「想像力」「表現力」を引き出すために、どのようにアプローチすべきか、ということが、各プログラムを通じてのテーマとなった。

【小学校低学年／高学年】【中学生】【大人】と年代ごとに内容を変えて募集を行った。内藤さんの演劇ワークショップは、演技が上手くなるアウトプットのための方法論ではなく、自分を取り巻く日常に対してどう解釈し、体験するかというインプットのワークショップであると感じたため、いわゆる、セリフをしゃべってお芝居を行う「演劇のワークショップ」とは違ったものであるということを表すために、チラシなどでも「演劇」という言葉はなるべく排除した。

2) 成果

小学生向けのプログラムとしては、演劇をやらない演劇ワークショップとして、はじめは戸惑いもあったようだが、講師とのやりとりは活発に行われ、やわらかい頭になって音や絵を感じることができた。高学年向けでは絵を書くことにも挑戦し、苦戦した子どももいたが、「見えないものを見る」ことに取り組んだ子どもの絵は、どれも個性的で興味深い絵を書くことができた。中学生向けのプログラムでは、対象としていた演劇部所属の中高生の応募自体が少なく、20代・30代の若い演劇人にも参加してもらい、絵を見るワークショップから、身体訓練・テキスト「屋上」に取り組んだ。その場を「感じる」「想像を共有する」という作業を丁寧に行うことで、テキストの世界観をよく理解し、短いシーンでも緊張感のある演技を全員で取り組むことができた。大人向けプログラムでは、全4回で創作から上演まで行うという内容だったが、最終的に25名の出演者が、その場で創作された脚本を繋ぎ、約30分のショートストーリーを上演できるまでになった。脚本を書いたことも、演劇自体の経験も少ない参加者もいる中で、全員でひとつの作品を作ることができたことは全員に達成感をもたらし、「想像を共有して世界を作る」ことの面白さ・楽しさを感じてもらえた。

●この事業全体を振り返って

小田原市の文化事業としては、プロの演出家が4日間に渡ってワークショップを行う経験は初めてのことであった。個性的な演出家の演劇観や内面世界を、どのように芝居を観たこともない人たちに伝えていくのか、不安であり、課題であり、また制作担当として最も興味深いところだった。

子どもや中学生にとっては、開催時期と年中行事などが重なった関係で参加が少なかったことは非常に反省の残る結果となった。参加者を市民から募る以上、限られた時間や期間の中でどう足を運んでいただくか、改めて考える機会となった。

大人が4日間連続でワークショップに通うことは、その点ではハードルの高さを感じていたが、その分、なにかを得ようという意識の強い方々に集まっていた。4日間での劇作・稽古・発表を通して、密度の高い演劇経験を共有することができた。この期間を共有した経験は、将来的に市民参加事業や演劇制作などを行う上で、貴重な人脈となって生きてくると感じている。また、全日程を通して地元の若手劇団の人にアシスタントに来ていただいたことは非常に有意義だった。様々な価値観や経験の方々が、多様な立場で関わることができ、地域発の演劇をこれから進めていくための手応えのあるワークショップだった。

●今後の事業展開

演劇の持つ物語性・再現性・社会性は、地域の歴史や伝統とともに、その土地の個人の記憶や人生、エピソードを融合させ、舞台化して共有・公演することに適している。市民参加で行う演劇などの事業については、地域の文化資源を掘り起こし、舞台化を通じて出演者・スタッフ・観客が共有することで、その地域のアイデンティティを再構築し、コミュニティの活性化やまちづくりに寄与するものとなる。

平成 29 年度の芸術文化創造センターのオープンに向けて、今回の演劇ワークショップで培った経験を元に、体験・鑑賞・参加を交えながら、事業展開を進めていく。

派遣アーティスト 内藤裕敬

■小田原市について

今回のリージョナルシアター事業では、一般向けに戯曲創作から上演までの4日間と、小学生への芸術ワークショップ(以下、WS)、中・高生への演劇WS。大きく分けて、この3種類の取り組みであった。小田原市は平成29年に新しい劇場をオープンする予定で、その為にも地域と、どう密着して劇場を運営していくのかが、まず第一の課題となる。

そこで、地域の劇団や演劇関係者との連携が大切となる。幸い、いくつかの若手劇団が小田原にあり、今は横浜方面での活動が主となっているようだが、その交流で横浜方面から若手の劇団諸君に参加してもらうことも可能だろうし、その中心となって在小田原の若手達が手腕を振るうことができると思われる。それと同時に学校との結び付きも大切になってくるだろう。特に演劇事業の未来には高校演劇との関係を、どのように発想してゆくべきか?担当者もそこに力を入れたいと話されていた。WSへの参加を積極的に呼び掛け、劇場からの派遣も含めて関係を深めたいとのことだった。そんなムーブメントを劇場が発進していければとの考えである。

そこで、まず、高校演劇等の特質を理解せねばならぬ。残念ながら高校演劇の指導者に専門的演劇訓練の経験者が少ない。ほとんどの皆さんが垂流、我流で指導されている。だからこそ新しく、面白い作品も生まれる可能性を多く有するが、間違った指導も放置されてしまう諸刃の刃だ。外部からの指導に積極的な方も少ない。また、専門的指導からのスキルアップを望む状況が地域の高校演劇に有るか否か。コンクールなどへ能動的に参加し、その成果を競い合ったり、作品発表への野心や喜びを持って取り組む演劇部がどれほどあるのか。その環境下においてWSの必要、需要も生まれるが、そもそも熱の上がない高校演劇の状況下でWSを呼びかけても空回りする。まず、WSありき、ではない。演劇に興味を持ち、その素晴らしさを体験し実践に向かう希望と熱意が土台に必要だ。笛吹けど踊らずの状況ならば、まず環境づくりが先決で、そして、その後、状況が生まれるのだ。演劇に取り組む学校への応援が要る。発表と制作の場を提供すべきだろう。それに対する評価がなければならない。そこから、更なる向上心と創作意欲が生まれた時、WSや合同での作品制作などの必要が発生するのだ。まずWSから…。それは的確ではない。

WSが有効な環境と状況を見極めねばならぬ。もしくは、現状に必要なWSのプログラムは、どのようなものなのかを捜さねば。WSは万能ではない。その使い方をまず考えるのが先だ。食べ物が食卓に無いのに調味料は使えない。水々しく実った食材を育まねばならない。畑を耕してからである。

一般のWSに目を移すと、平塚、戸塚、茅ヶ崎、鎌倉等々、湘南から横浜にかけての参加者が多くいた。新宿や下北沢へ出るよりも、小田原の方が便利だという意見を多く聞いた。皆さん講座の内容への理解度も高く、文化意識と水準の高さも感じた。熱海、三島、沼津からも近く、関東の南、静岡をも結ぶ拠点となる条件がある。今は、箱根への入り口で通過点としての賑わいだが、目的地が小田原になる可能性を感じた。小田原は、横浜と新宿をV字にした所に位置する。両方から作品を呼べて、両方から観客を呼べるだろう。加えて背後の静岡からも。東京、神奈川、静岡の交流の中心になれると思う。その意識と方針を劇場がビジョンとして持てるかどうかだ。予算も要る。企画も。しかし、それは、地域の観光に大きく影響し、教育や文化だけでなく、小田原という都市の新しい可能性の開発となる。

この立地を生かせるのは、他地域との多様な交流にこそあると強く感じた。元来、誰もが知る宿場街、交通と交流の拠点だった小田原だ。これから文化、芸術の宿場街を新しい劇場が発想できるかどうかだろう。



■公募型ワークショップの流れ

8月28日~31日までの4日間、連続で実施。

参加者:20代~60代までの約30人。

1回目/8月28日(木)19:00~21:00

①面白い作品とは何かを全員で考えディスカッション。

作品の内容が「わかる」「わからない」ということではなく、想像力に訴えてくる作品が面白い。可能性に向かって、遊びながら作品をつくるとはどういうことかを全員で共有する。

②戯曲を書く

原稿用紙の使い方を説明。

『家に帰ると脅迫状があった。』という書き出しの後を続ける。20分程度で書いて発表する。



戯曲を書く練習。展開を面白くさせるためのイメージを持つことを①で話しているの、そのイメージを持って書いていく。

2回目/8月29日(金)19:00~21:00

①体を動かすゲーム。

②午後に行った小学校高学年対象のワークショップで描かれた絵をみんなで見ながら小学生がどのように想像力を働かせたかを共有する。

③戯曲を書く。『冷蔵庫を開けると白いうさぎと目があった。』という書き出しの後を続ける。50分程度で書く。



前日に一度書いているので、少し書きやすくなっている。

3回目/8月30日(土)18:00~20:00

①前日に書かれた戯曲を内藤氏が構成して完成台本をつくり、全員に配布後、本読み。配役を決めて各シーンで本読みをする。

②全体で稽古。



上演時間約30分の台本を翌日の発表に向けて稽古する。箱馬を重ねた物を冷蔵庫に見立てて、冷蔵庫の扉を開けるところから始まる。

4回目/8月31日(日)18:00~20:00

①通し稽古

②発表本番(参加者の家族や友人が観客になる。)



4日間で劇作家と俳優の体験をするWSだったが、戯曲を書くということに興味を持った人や熱心に稽古する人が多く、全体的に参加意欲の高さが見えるWSとなった。

内藤裕敬×多田淳之介 対談

平成26年12月12日 東京にて
進行:大垣敬子(地域創造)

大垣:演劇を教えるワークショップ(以下、WS)は、これまでにお二人とも、たくさんの経験があり、これからも依頼があれば実施されると思いますが、ここ数年、演劇を直接的に教えないWSも増えてきたと思います。この演劇を教えないWSというのは、個人や他者の普段見ることのなかったような部分を発見したり、気づかなかった可能性に向かう、きっかけとなるようなプログラムとして、演劇を応用したWSも行われるようになってきました。この演劇を教えないWSについてお二人の考え方をお聞かせください。



多田:演劇を教えないWSとは、自分がなぜ演劇をしているのか、ということが重要になってくると思うんです。すると内藤さんが、なぜ演劇をやっているのかが気になります。

内藤:演劇や映画、絵画を見ても音楽を聞いても何を面白がるかという、想像力を触発されるかどうかことが重要。作品が難しく面白くないならわかったほうがいい。わかりやすくて面白くなかったら、難しいほうがいいと思っている。そこは、想像力の問題で、わかることで想像力が閉じてしまうなら、わからないほうがいいし、わからないことで想像力が閉じるなら、わかったほうがいい。WSの場合も、想像力を触発されるかどうかを核に置いて、そこに演劇のノウハウを持ち込んでいる。たぶん20年くらい前に地域創造のステージラボという研修事業で、演劇のWSを依頼されたころは、演劇をつくる体験を遊ぶようなことをやっていたけど、あまり深く考えていなかった。本気で取り組むようになったのは、10年くらい前からだと思う。

多田:いかにしてそういうことに辿り着いたんですか?作品をつくり続けている事と関係ありますか?

内藤:作品づくりの稽古場で俳優が思考の中でつくる場合と、遊びの中から発想する場合とがあって、遊びの中から発想されたものの意外性が新鮮に感じる。その可能性は、大学時代から考えていたので、いろいろなテキストで即興的な取り組みをしていた。それが遊びの開発に繋がっていると思う。

多田:10年前というとアーティストとしてだいぶ熟成されているというか、アーティストとして持っている力が上手くWSに活かしている感じがします。今の若いアーティストは、作品づくりとWSプログラムをつくるのが同時並行になっていて、WSができなくてはいけないと言われるケースもあり、作品をつくっているだけではダメですか?という人もいます。やりたい人だけがやればいいという考え方もありますが、どう思われますか?

内藤:基本的には、作品をつくっているだけでいいと思っている。僕は30代くらいまで、芝居がダメな奴がWSをやっていると思っていたから、一生懸命WSに取り組まなかった。大学時代から演劇の社会的な応用や有効性を担当教授から相当言われていた。重要なことだと思ったが自分の仕事だとは思っていなかった。けれど、担当教授が亡くなられたことがきっかけで自分がやろうと思った。

多田:演劇を教えないWSは、すごくいいと思っていて、むしろ演劇を教えるWSの方に、僕は興味が薄い。もし、演劇を教えないWSの難しさがあるとすれば、ホール側の人や先生がまだすぐには、理解してくれない。アウトリーチ先の学校に行くと演劇のプロが演劇を教えにきてくれたと思われていて、ホール側も話を通しやすいので「では演劇部でWSをやしましょう」という流れになることに不満を感じます。

内藤:そこは、日本で一番遅れているところ。芸術が生活の中でどれほどの有効性があるかということ

は、一般大学の一般教養で勉強すべきだと思う。そういう勉強をした人がホールにいるべき。

多田:日本社会への演劇の入り方が音楽とも違って、学芸会から高校演劇までという印象が強い。

内藤:演劇WSだけ演劇を直接やらないというのが、ひとつのジャンルとして確立されれば状況が変わる。

多田:演劇の技術移転はWSと呼ばないでほしい。

内藤:多田君はWSをつくるときにどこに苦労しているの?

多田:失敗しても大丈夫なようにする。どう転んでも大丈夫という状況をつくる。そこに苦労します。間違えてもいい、失敗してもいい、恥ずかしがってもいい、それさえできればいいくらいに思っています。そこに説得力さえあれば、発表が上手くいかなくても、いい体験だったと思えば、先生も納得できると思っています。

内藤:僕は、万能型のプログラムを考えたい。相手が誰でも、どこへ行っても通用するプログラムを発想したい。だから音楽と絵画を使うと幅が広がっていいけれど、台本を使った場合や演じる要素を入れると万能型になりづらい。演劇自体が音楽や絵画と密接に繋がっているので、演劇をやっている人は、音楽や絵画を上手く扱えると思う。演劇以外のジャンルをどうやって演劇の手法に持ち込むかがポイントだと思う。

多田:僕は、喋ったことを再現したり、非言語コミュニケーションを使ったりしていますが、それだと障害者の人とはできないので、弱点だと感じています。演劇作品は時間が決まっていて、どの時間にどういう体験をするかということがWSと同じだと思うので、導入後、メインに向かってどういう道のりで、どう組み立てるかというのは、演劇をつくることもWSをつくることも全く同じだと考えています。WS自体(全体像)が物語になればいいと思っています。物語や台詞など、いわゆるザ・演劇を直接使わない、教えないプログラムだけど、演劇を使ったプログラムであることが大切。演劇はそういう風に使われるべきだと思います。

内藤:結果的にそこへ着地すれば成功だと思う。目的に向かうと理詰めで遊びがなくなるから説教くさくなる。そうならないためには、遊び倒せるかどうか大事。

多田:以前、聞いた話で音楽の世界では楽器を通して、悲しい表現が悲しいと伝わるのがいいことで、悲しいと表現したのに楽しいと伝わると失敗だと。これが演奏家の背負っているミッションなんだと。我々演劇人がやろうとしていることは、正反対なんだと思った。

内藤:音楽は音符に制御される。セリフをどう発想するかよりは、幅が狭い。音符も文字(セリフ)も同じ記号に向き合っているのだけれど、文字より音符の方が狭いよね。

多田:音符のほうが抽象的なのに自由度がないですね。

内藤:演奏技術のほうに偏って、本人の想像性を発揮する行間のようなものは狭い。その狭いところを狙ってやるので、孤独で内向きになる。すると、相手がどこにいるのかわからなくなる。演劇の場合は、必ず観客がいることでしか成立しないという環境があるから、その中でセリフがどう存在しうるかをやっているのだから、途轍もなく演劇のほうが幅が広い。

大垣:こういう取り組みができるアーティストが100人いると、日本という国は変わる可能性があるかと、内藤さんから以前お聞きしたことがあります。具体的にお話しいただけますか。

内藤:良い体験をしたならば、良い現象としていつかは現れると、僕はワークショップをつくるときに信じている。それは、劇団で演出をするときも同じで、会話というのは、誰かが誰かに何かを言っ



て、それを聞いた人が、聞くという体験によって何か自分の中に現象が生まれる。その現象がその人のセリフを生む。また、そのセリフを体験した相手役が何かの現象を生んで、その現象から別のセリフを生む。つまり体験と現象の連鎖で会話が成り立っている。それは、会話だけではなく、広い意味で言えば何か仕事をすることや、誰かと出会うとか、いろんな体験をする。人は、必ず体験から何かの現象を生み出すのです。WSもどれだけ豊かな体験を提供できる



かということが大事です。そういうことができる芸術WSが頻繁に行われ、あちこちに体験した人がいれば、必ずやいろいろなところで良い現象として現れてくるはずだと思う。人づきあいが上手くいけば、学校のクラスだって上手くいくだろうし、職場の環境も良くなるかもしれない。アウトリーチプログラムを遊びの延長として、豊かな体験を提供するアーティストが、例えば東京に100人いて、1人が30回やれば3000回になり、そこに10人が受けに来れば30000人が体験することになる。100人が頑張れば5年先、10年先、世の中が変わるんじゃないかと、僕は信じている。

多田:東京で100人も育つか?意外と東京で人が育たない。

内藤:全国で育てて、北海道でも大阪でも九州でもいい。1年間やる。そこで何かの現象が生まれると周りが注目する。

多田:体験をつくりだすというのは、本当に原点ですね。例えば、100人いれば変わるということを信じることができれば、今100人無理だけど何をすべきかを考えられる。

内藤:音楽ファンも演劇ファンになった人も、みんな必ず良いコンサートや舞台を見る体験をしている。

多田:僕の演劇体験は、観劇じゃないんです。WSなんです。面白い演劇を見て演劇を好きになったわけではなくて、大学生のときに映画学科だったんですが、演劇WSを受けて演劇ってすごく面白いんだと感じた。そこからなんです。これが僕の作品にも影響していると思います。演劇自体をちょっと疑ってかかっているところが。

大垣:そういうアーティストを育成するための大事なポイントを教えてください。

多田:WSを受ける体験も必要。僕は、その体験があったからこそ、WSについて真面目に考えるきっかけになったので、そういう体験から何を得るのかという個人差はあると思いますが。

内藤:大きく分類すると体験型と観賞型のWSがある。観賞型は、コンサートや舞台を見るのとあまりかわらない。体験型の種類もいくつかありますが、対話型が有効ではないかと思う。これは、対話に対する適応性がアーティストに求められる。参加者と一緒に遊べて、楽しめて、発想を膨らませたり、発展させたりすることを楽しめる資質が必要になる。毎回、違う人と対話をしていかななくてはいけないから、人間が好きでないといけない。

多田:自己犠牲をしているわけではないけれど、自分より他者のことを考えられるかどうかが大切。本人がそういう適性を持っていなくてもできるプログラムがあれば、アーティストは増えますよね。プログラムなのかシステムなのかわかりませんが。

内藤:プログラムだろうね。芝居の稽古のように訓練して、ある程度、人が変わっても対応できるように幅を持たせられれば。ある程度スキルを磨いたらできるようなプログラムをいくつか開発できれば。

多田:作品づくりの稽古は、演出家や俳優なら必ずやっていることなので、稽古から本番に持っていく能力があれば、誰でもできるプログラムというのがあるといいのかな。そっちが近道かもしれないけれど、それでいいのかという一抹の不安もある。僕の思いとしては、こういうことができるアーティストが増えてほしいです。そうでないと演劇界全体も良くなっていかない。



大垣:アーティストと同じくらいコーディネーターも不足していると思いますが、コーディネーターに必要な要素を教えてください。

多田:作品を見てくれているか。アーティストの演劇性のどこをどのように活用したいと思っているか。当たり前のことが当たり前できていればと思います。今回は多田さんにこういうことをやってほしい、という話ができるといいですね。「好きにやってください」が一番困る。

内藤:コーディネーターに関しては、基本的に諦めている。優秀なコーディネーターに当たってよかったと思うことは殆どない。アーティストは、WS及びアウトリーチの必要性、有効性、重要性をわかってもらうことをやっているが、そのことを理解しているコーディネーターは少ない。作品づくりのクオリティや結果に責任をとるプロデューサーと同じで、コーディネーターは、アウトリーチの環境設定(対象者、場所、時間、人数、内容等)を全てセッティングする必要があるが、おおよそアーティストに丸投げが多い。結果に対する責任もアーティストが負っていることが多い。この環境設定では無理だと、お手上げ状態のような場合でもやらなければいけないのがアーティストだから。何とかしたいという熱意や信頼関係がないとできない。

大垣:お二人が思う信頼関係とは、どういうものですか？

多田:同じように悩んでくれる。例えば、「今日、途中で帰る人が3人いるんです」というときに、それがどれくらい困ることなのかということのイメージが共有できている事は大事ですね。

内藤:受ける側(参加者)とやる側(アーティスト)の両方のことを考えている人でないと。両方のことを考えずに自分のことしか考えていない人が多い。自分がセッティングした仕事をこなさなくてはという、自分の作業しか見えていない。それでは、信頼関係を築けない。セッティングが上手くいっていないときに「上手くいきません」と正直に状況を言ってほしい。セッティングが曖昧なまま「あとは、よろしく」という人が多いと思う。

多田:アーティストとコーディネーターの双方の数が、ある程度揃っていないと、両者ともに育っていかないですね。

●茅野市(長野県)

参加館 実施データ

実施団体	株式会社地域文化創造
実施ホール	茅野市民館
担当者	久寿田亜季 荻原みゆき
派遣アーティスト	岩崎正裕
アシスタント	佐々木淳子(2・3回目派遣)

1 回目派遣の内容

- ・茅野市尖石縄文考古館見学(学芸員からの説明、茅野市内における縄文文化についての考察)
- ・北山小学校との打合せ(顔合わせ・会場下見・実施内容の確認と調整)
- ・茅野市民館打合せ(一般ワークショップ実施内容の確認と調整)
- ・諏訪大社、茅野市神長官守矢史料館見学(茅野市フィールドワーク)
- ・永明小学校との打合せ(顔合わせ・会場下見・実施内容の確認と調整)
- ・米沢小学校との打合せ(顔合わせ・会場下見・実施内容の確認と調整)

2 回目派遣の内容

- ・茅野市立永明小学校アウトリーチ(会場)視聴覚室
(日時)7月3日(木)5年1部 31名/7月4日(金)5年2部 32名 5年3部 31名
(内容)「伝える」イメージ、いらぬものを燃やしちゃえ、縄文土器を触って回す、班になって土器を使った家族の静止画、縄文人の見たものは?、岩崎さんの「詩」を読む、声を伝えよう、等。
- ・一般WS「岩崎正裕演劇ワークショップ 演劇の時間」(会場)茅野市民館アトリエ
(日時)7月3日(木) 18名(内容)アイスブレイク、土器を使って、詩を読む
(日時)7月4日(金) 17名(内容)タオル使って、鬼ごっこ、コント、書いた絵を。。。。

3 回目派遣の内容

- ・茅野市立北山小学校アウトリーチ(会場)ワークスペース
(日時)7月10日(木) 5年1組 27名 授業参観
(内容)「伝える」イメージ、いらぬものを燃やしちゃえ、縄文土器を触って回す、班になって土器を使った家族の静止画、縄文人の見たものは?、岩崎さんの「詩」を読む、声を伝えよう、等。
- ・茅野市立米沢小学校アウトリーチ(会場)視聴覚室
(日時)7月11日(金) 5年1組 18名/5年2組 18名
(内容)「伝える」イメージ、いらぬものを燃やしちゃえ、縄文土器を触って回す、班になって土器を使った家族の静止画等。※台風のため短縮プログラム
- ・一般WS「岩崎正裕演劇ワークショップ 演劇の時間」
(日時)7月10日(木) 18名(内容)台風 カードを引いて。。。、イス、ぎゃ行 桃太郎・シンデレラ
(日時)7月11日(金) 16名(内容)小さな発表会

1～3回目派遣のスケジュール

	1 回目 6月19日(木)	20日(金)	2 回目 7月3日(木)	4日(金)	3 回目 7月10日(木)	11日(金)	12日(土)
9:00				永明小5年2部 (8:45~10:15)			
10:00			土器レプリカ確 認・打合せ	永明小5年3部 (10:45~12:15)		米沢小5年1組 (10:45~11:30)	事業全体の フィードバック
11:00		永明小学校 下 見・打合せ		フィードバック		米沢小5年2組 (11:35~12:20)	
12:00		昼食		12:30 永明小出			終了
13:00	茅野市尖石縄文考 古館 見学	諏訪大社、神長官 守矢史料館見学	永明小入り	昼食	北山小5年1組 (13:10~14:40)	昼食	
14:00			永明小5年1部				
15:00			15:30 終了				
16:00	北山小学校 下見・打合せ	米沢小学校 下見・打合せ	フィードバック				
17:00	打合せ(市民館)	打合せ(市民館)	打合せ(市民館)				
18:00		終了					
19:00			一般WS①	一般WS②	一般WS③	一般WS④	
20:00							
21:00	終了		終了	終了	終了		

●この事業への参加理由

開館から8年経過し、様々なプログラムを活用しながら多彩な事業を展開してきた。しかし、「演劇」への環境づくりについてはまだまだ発展途中である。鑑賞者にとどまらず、他者とコミュニケーションをしながら一つの作品を創作するプロセスを体験すること、そして、自分たちと観客がいることで舞台が成り立つことなどを学び、表現をする楽しみや喜びを持ち、地域へ還元できるのではないかと考えている。多くの市民が「演劇」に関心を持つきっかけとして演劇のワークショップを行うことを意図し参加を希望した。

●今回のプログラムの目的と成果

・アウトリーチ<小学生>

(目的) 縄文をテーマに、身体と言葉との関係と、頭の動きやココロの動きについて理解しながら、感覚的な部分をより解放することを体験する。社会を生き抜く力の養成をめざし、自立・協働を通じて更なる新たな価値を創造していくことができることを目的とする。

(成果) 縄文を題材に、自由に表現できたことで、日本人としてのアイデンティティを確立し、郷土に愛着をもち、自己を肯定することで世界へ飛び立てるのではないかと考える。正解がない、正解を求めない世界もあることに気づき、想像力と創造力をより高め、一人一人が多様な個性や能力を伸ばし充実した人生を主体的に切りひらいていけるようになるであろう。

・一般ワークショップ<公募一般>

(目的) 地元大学の劇団員や、舞台創造に興味がある市民(高校生以上)が対象。10代~70代まで様々な年代の人達と交流し、演じるとはなにか?から自己を探求するプロセスを一緒に行うことで一つの作品をつくる喜びをわかちあう。

(成果) 今まで茅野市民館に関わってきた人とともに、新しい人が出逢う講座となった。また、表現者として関わる術を身につけ、一人一人が責任を持ち、相互の関係性を鑑みながら、最後には感動的な作品を創造した。ここで生まれたネットワークは茅野市民館の他の主催事業(ばらのおはなし)につながっている。

●この事業全体を振り返って

アウトリーチでは、通常の授業において、答えを求められ、正解を見つけることを学習してきた子どもたちに、表現するということに「正解はない」ということ、自由に想像の翼を広げ、そのことを人に伝えるにはどうしたらよいのか、などなど新たな気づきが生まれたのではないだろうか。演劇のもつ力とは、そこにいる人が生き生きと、五感をフルに活用して他者と時間、空間までも一緒に旅する行為の中から生まれてくる。その力を信じてこれから茅野市の文化を築いていく市民が活動する土壌が出来、ふくいくとした芽がこれから芽吹くであろうと感じている。

●今後の事業展開

茅野市民館は平成27年10月に10周年を迎える。2015年(平成27年)11月に市民の手でつくる実演芸術に向けて様々な取り組みが始まっている。テーマソング詩の募集、曲の発表、縄文ハウジング、縄文ダンス、縄文ファッションなどを企画している。しかし、10周年は一つの通過点とし、みなが集まりみなで創造する、という活動を通して茅野市民館が茅野、および、世界の未来を豊かに明るくする希望を見出す地点であること、そのことをステップにして市民の自立した活動のすそ野が広がることを期待している。

派遣アーティスト 岩崎正裕

■茅野市について

これまで小学校向けのワークショップについては、「他者と関わることで、その関係に新たな気づきが生まれる」というようなことを主眼に取り組んで来た。地域が変われど、その内容を変更することはあまりなかった。ところが今回、茅野市民館の担当者からの申し出は「縄文時代を絡めた演劇ワークショップをやって欲しい」とのことだった。正直に言えば最初は戸惑った。こちら側に縄文を語る知識は皆無であったからだ。しかし、担当者の熱意は強かった。その理由を訊けば、茅野市には多くの縄文の遺跡があること。そこから出土した縄文のビーナスが国宝に指定され、小学校では縄文時代についての授業が広く行われていること、などが挙げられた。最初の下見に訪れたその日、各小学校でのリサーチはもちろんのこと、縄文土器や土偶が展示される博物館の見学と、その時代の住居が再現されている森の散策も時間割に組まれていた。学芸員さんに説明を受けながら、縄文土器を見て回るうちに、縄文時代については、確定した学説が極めて少ないことが分かってきた。これなら演劇的想像力とリンクさせられるのではないか。新しいプログラムに取り組む姿勢となった。

新しいプログラムを担当者と話し合いながら作り、実践する運びとなったアウトリーチ当日、教室には縄文式土器がずらりと並べられた。土器のレプリカを博物館側の計らいで貸し出してもらったのである。日頃から、劇場の担当者と学芸員の皆さんが良好な関係を築いておられたことが実現に繋がった。実際に小学生に触ってもらい感想を聞く。重さや匂いなど五感を通した様々な感想が出てきた。続いて、この土器の数々は何に使われていたのか、グループに別れて、縄文の人びとの様子を静止画として発表してもらおう。植物の実の貯蔵や煮炊き、贈り物とされた土器、豊かな発想が具現化した。高度な文明の中で暮らす私たちが、太古の昔に想いを馳せる。富の集約が始まったのは、稲作を始めた弥生期以降だと云われる。弱者も強者もなく、自然の恵みを分配したであろう縄文の人びと。最後はそのイメージを「夢みる縄文人」という自作の詩に託し、朗読と動きを組み合わせて発表とした。参加した子どもたちには、確かに縄文時代に興味を持てる素地があった。実際に図工の授業などで土器を作るのだそう。最初は半信半疑で始めたプログラム開発であったが、担当者の想いと実行力に後押しされて、小学校側も我々アーティスト側も、納得のいくワークショップとなったのではないだろうか。

小学校アウトリーチのあと、夜は一般対象のワークショップが組まれた。地域に向く我々アーティストにとって、昼夜と続くワークショップは過酷ではある。しかし事業目的が確かなら、労を惜しむことはない。このワークショップは2日+2日の計4回でステップアップを求められるものだった。1回限りのワークショップでは参加者相互のコミュニケーションが円滑になる、という程度のところまでが可能となる。4回となれば、かなり創作の範囲が広がる。参加した受講者は16~18名。ほぼ継続しての参加となった。劇場サポーターの参加も多く見受けられ、そこに新しい参加者が加わった。4回目の最後は全員で「人の一生」を演じる即興劇を作った。幼児から高齢者となるまでのシチュエーションに、必ず「花」を手渡される場面が挿入される。参加者の年齢の幅が広がったこともあり、説得力を持つ劇が生まれた。連続したワークショップの成果である。一般向けワークショップの効果は「失われたコミュニティの再生」のようなものだろうか。世代を越えて、新たな共感を育む。茅野市民館はそんな場所とし機能しているようだ。



■小学5年生 1クラス 5、6時限目(90分)のワークショップの流れ

①演出家から「ルールのある遊び」の説明

②シアターゲーム

- ・円になって同じリズムで1人ずつ手拍子をまわす。
- ・1人の動きを全員で真似る。

③「火をくべる」

全員が円になっている中央にアシスタントの俳優が座る。俳優は「火」の役割。
この火に1人ずつ燃やしたいもの(人間以外)を入れて行く。
「地球」「宿題」「古い洋服」「肉」「野菜」など

④「縄文土器」

尖石縄文考古館からお借りした縄文土器のレプリカがテーブルの上に6つ並んでいる。
円になって座っている子どもたちに1つの土器を手渡して、順番に隣の人に手渡していく。土器をどんなふう
に感じたか1人ずつ聞いていく。

「重かった」「固かった」「臭かった」「冷たかった」「ごつごつしてた」など感想が出る。

グループに分かれて1班ずつにプラスチック製の鉢植えを1つ渡す。これを縄文土器と見立てて、この土器
が使われている様子を1枚の絵のようにして表現する。

「おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、弟の構成で、土器が鍋になって煮炊きをし、
夕食の準備をしている風景」など。

⑤声を出すゲーム

家から学校に来る間に見た物を1人1つ出す。

「信号」「車」「電信柱」「自転車」「犬」「水たまり」「家」「川」「山」など。

一番小さな声で全てを読む。5段階くらいで徐々に大きな声で読んでいく。

休憩

⑥声を出すゲーム

縄文人が見ていたであろうものを1人1つ出す。

「火」「星」「井戸」「月」「かまど」「太陽」「竹」「洞窟」「虫」「草」「象」など。

一番小さな声で全てを読む。5段階くらいで徐々に大きな声で読んでいく。

⑦詩を表現する

1枚のテキストになる詩「夢見る縄文人」を全員で朗読する。

詩を朗読するグループ、体で表現するグループ、観るグループにわかれてやってみる。

●豊岡市(兵庫県)

参加館 実施データ

実施団体	特定非営利活動法人コミュニティアートセンタープラッツ
実施ホール	豊岡市民プラザ
担当者	居相歩美 仲山啓一郎
派遣アーティスト	田上豊
アシスタント	石松太一、堀りん(2回目派遣)
<p>1回目派遣の内容 コウノトリの郷公園、出石永楽館、城崎国際アートセンター 視察 資母小学校、豊岡小学校の下見・打合せ。 2回目派遣の一般ワークショップ内容と進め方について</p>	
<p>2回目派遣の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資母小学校WS(28日、29日10:45~12:20 3・4時間目 計180分) 2学年合同で実施。会場:視聴覚教室 5年生(男子5名、女子7名、計12名) 6年生(男子4名、女子5名、計9名) 5,6年生の合計21名 ・豊岡小学校WS(29日5・6時間目 30日3・4時間目)会場:多目的室 29日13:45~15:20(90分)4年2組(男子14名、女子15名、計29名) 30日10:40~12:15(90分)4年1組(男子15名、女子15名、計30名)給食有 30日13:20~14:40(80分)合同発表会(父兄の見学) ・公募WS(28日~31日 19時~21時 計4回)会場:豊岡市民プラザリハーサル室 「演劇ワークショップをつくる」 計4回で①WS体験、②WS講座、③プログラムづくり、④発表 28日(17人)、29日(15人)、30日(14人)、31日(15人) 	

1~2回目派遣のスケジュール

	1回目		2回目					
	9月25日(木)	9月26日(金)	10月27日(月)	10月28日(火)	10月29日(水)	10月30日(木)	10月31日(金)	11月1日(土)
9:00	空港着	出石永楽館						
10:00	コウノトリの郷公園	城崎国際アートセンター		資母小学校	資母小学校	豊岡小学校		事業全体のフィードバック
11:00				アウトリーチ	アウトリーチ	アウトリーチ		
12:00		解散						
13:00					豊岡小学校	豊岡小学校		
14:00					アウトリーチ	合同発表会		
15:00	資母小学校打合せ							
16:00								
17:00	豊岡小学校打合せ							
18:00			打合せ					
19:00	公募WS打合せ							
20:00				公募WS①	公募WS②	公募WS③	公募WS④	
21:00								

●この事業への参加理由

豊岡市民プラザでは、H24 年度リージョナルシアター事業に参加し、地元で伝わる物語を題材にしたお芝居を制作し、生の舞台芸術に触れる機会の少ない但馬の子どもたちに演劇の楽しさを届けたいという願いで小学校アウトリーチを行ってきました。

今回のリージョナルシアター事業では、現在行っているアウトリーチと別角度からアプローチを行い、子どもたちの創造性、対話力を伸ばす演劇ワークショップを地元の人材で行えないかと考えました。課題である人材発掘・育成のため、実力あるアーティストのワークショップ講座を開講し、ワークショップ構築のための基礎とファシリテーションの実力をつける場として活用したいと考えました。地元で活躍する人材が長期的にアウトリーチを行える環境になれば、ワークショップを子どもたちに届ける機会の増加につながると考え、参加しました。

●今回のプログラムの目的と成果

小学校アウトリーチ

目的：演劇ワークショップのアウトリーチを行い、子どもたちの表現力、想像力、コミュニケーション力を育成する。

成果：演劇ワークショップで自己表現を自由に行ったことで、子どもたちひとりひとりが主役となることで、子どもたちが互いの新しい一面を発見し、認め合う瞬間が生まれました。

社会人公募ワークショップ（ファシリテーター養成講座）

目的：演劇ワークショップの基礎を学び、将来的に自分達でワークショップを創作できる力をつける。

成果：小学校教員を中心に参加を呼びかけたことで、新しいネットワークの構築が出来ました。但馬であまり周知されていなかったワークショップを実際に受講したのちに、目的と内容を解説していただいたことで、プログラム内容の理解が深まりました。そのことを踏まえ、劇場、一般参加者が共にワークショップを考える時間は新しい試みでしたが、今後につながる実り多い時間となりました。

●この事業全体を振り返って

劇場側が小学校にアウトリーチに行く事、劇場のミッションについて繰り返し考え続ける時間だったと思います。小学校アウトリーチと公募ワークショップを柱にこの事業を構築しましたが、アーティストとの事前の打ち合わせ、現場での対応等、劇場側が果たす役割を改めて考えさせられました。

小学校アウトリーチ、社会人ワークショップでは、劇場と今まで繋がる機会のなかった方々と、ひとつのコミュニティを作れたことは豊岡にとって得難い貴重な機会となりました。「ワークショップ」がまだまだ馴染みのない地域で、その効果を現場の教師の方々と一緒に体感し、プログラム作成にとりくんだことは、事業終了後の次のステップへの足掛かりとなったと思います。

●今後の事業展開

今回つながることのできた皆さんとワークショップ研究会をつくり、定期的に勉強会を開催し、将来的に自分たちでワークショップが行えるように環境を整え、継続して取り組みたいと思います。

教師の皆さまの声を聞き、学校教師を対象とした研修会の開催を考えています。

派遣アーティスト 田上 豊

■豊岡市について

豊岡市民プラザで夜間に行われた講座は、劇場職員と教職員とがワークショップ(以下、WS)のプログラム開発を体験する取り組みでした。この取り組みでポイントなのは、劇場職員と教職員とがタッグを組んだことです。豊岡の場合は、即戦力となるような実践講座の前段階として、教育現場におけるWSとは何かという概念や概要をお伝えする所から始まりました。

「劇場職員が教育現場におけるWSを今一度理解しておく必要性を感じる。なぜなら、そもそも数多くあるWSの中で、どういったWSが有効で、どういったものが有効でないのかの違いがよく分からない。」これが豊岡の劇場の方からの率直なご意見でした。この発言から、将来のためにWSを捉える「目利き力」を備えたいという劇場のミッションを感じ取れます。

豊岡での夜間の講座は、劇場職員と教職員とが簡単なWSのプログラミングや実施の体験を通して、様々な意見を交わす場となりました。これは、今後地域の教育現場でWSを行おうと思っている劇場にとっては、最高のコミュニティです。なんせ、教育現場の現状を直に知ることができますし、逆に教育現場の方にWSのことを深く理解してもらえる機会にもなり、一石二鳥だからです(豊岡はコウノトリの町です)。ただし、この二者が集っただけで安心出来るものではありません。今後、今回の夜間講座で知り合った教職員の方々と劇場職員とでWS研究会のような継続性の有る「意見交換の場」が存続することを強く願っています。そうして、双方でアートにおけるWSの有効性を共有し、密な情報交換を行い、二者間で協議の末に派遣アーティストを導き出す、そんな協働コーディネートが行われる日を夢見ています。先生と職員という立場を超えて、よーいどんで始めた夜間講座。せっかくなので、豊岡市民プラザには是非とも劇場+教育機関で協働アウトリーチ事業が展開する良きモデルケースとなって頂きたいです。

現在、アーティストの行うWSが、社会の様々な分野で活用されています。そして、ここ数年で飛躍的に進んでいるのは、アーティストがコーチングする社会人向けのWSのプログラム開発やファシリテーター育成の講座です。演劇のWSで例を挙げれば、その活動内容に含まれる「協働性」「創造性」が、社会の中の「コミュニティ形成」や「アイデア誘発」が必要な場において効果的であるとされています。

私の場合は、教育機関に出向くことが多く、WSの内容としても「表現との出会い」に目的を置いたプログラムです。その出会いを有意義にするべく「無形のものを形作る際に必要なチーム作り」や「アイデアを出し合うための柔軟な発想法」などが含まれています。そして、その全てが、「表現との有意義な出会い」という部分に回帰するようプログラミングされています。

WS開発には、プログラムの根底に、「自分にとって切実なミッションを存在させること」が必要です。これがプログラムの0地点です。0地点が明確でない上でプログラミングを行うと難儀します。また、組み方や並べ方だけが整っていても、世界観(0地点)がないワークショップは、強度が弱い。また、0地点を持ち合わせぬままファシリテーションの向上を求めても、それは表面的な技術移転となってしまうかもしれません。個人的には、0地点があって、その上でプログラムがあり、そのプログラムに適したファシリテーションを行う、この三位一体のWSこそが、優良なワークショップではないかと考えています。

WSの開発とは、自身の「作品(世界)」であり、「その作品(世界)の遊び方を示すもの」です。それは、とてもエネルギーのいる構築活動であり、土台を支えるミッションに向かって突き進む「愛」の作業です。プログラム開発やファシリテーションの向上を求めるのなら、まずその前に、「誰のために、なにをどうしてあげたいのか」という自身の目的意識を明確にすることが先決です。それが、最大の推進力となり、手法や技術の先にあるWSの持つ魅力と遭遇出来る鍵となります。



■公募型ワークショップの流れ

< 4日間の目的 >

完璧なプログラムをつくることではなく、ワークショップの導入部分をつくり、ファシリテーターの役割を理解すること。

1日目／10月28日19:00～21:00 参加人数17名

①ワークショップを体験する。

小学校で実施した90分のプログラムを参加者が体験する。

②全体でフィードバック

体験することでWSの受け手の気持ちを理解する。



講師に対するわかりづらい言い回し、次の手順、やろうとしていることを引き出してくれているかなど理解しやすい言葉の選択ができてきているかがよくわかる。

2日目／10月29日19:00～21:00 参加人数15名

①講師の自己紹介を含め、WSをやり始めた経緯を話す。

②プログラムの構造と構成、流れをレクチャーする。

③2チームに分かれて各チームにテーマを出し、45分プログラムをつくる。

Aチーム：小学校高学年対象「手を挙げない生徒が多い。アイデアに乏しいクラス」

Bチーム：小学校高学年対象「クラスの仲がよくない。協力が苦手なクラス」



プログラムの構造や構成を理解した上で、テーマを解決するプログラムをつくと一つの手法が有効に働くのかを検証できる。その積み重ねで全体像ができあがっていくことを知る。

3日目／10月30日19:00～21:00 参加人数14名

①ゲームを2種類行う。

②WSプログラムのつくり方を簡単に説明した後、2チームに分かれて前日の続きを行う。



①の2種類のゲームは、いかに講師が難しいかを体験する入口になるもの。その体験をもとにつくり始める。

4日目／10月31日19:00～21:00 参加人数15名

①プログラムの最終調整

②Bチーム45分間プログラム実施(参加者はAチーム)

③Aチーム45分間プログラム実施(参加者はBチーム)

④全体でフィードバック



実施後に全体で感想や意見を出し合うことで、プログラムのメリット、デメリットに具体性が出る。

岩崎正裕×田上 豊 対談

平成26年11月2日 北九州市にて
進行:大垣敬子(地域創造)

大垣:作品づくりとアウトリーチの関係性を普段どのようにお考えですか。

田上:最近の印象としては、アウトリーチが作品づくりに影響を与えているとよく感じます。ワークショップ(以下、WS)を行うことでコミュニティが活性化される(学校のクラスの仲がよくなる)と言われたりしますが、僕は1クラスを見るときに組織として見るので、どうにか活性化していかないかという



視点で見えています。それと劇団やプロデュース公演での作品づくりのチームワークを良くしていくときの作業は、アウトリーチと殆ど同じだという実感があります。学校で行うプログラムを作品づくりの俳優にも行うので、あまり違うことをやっているという感じはありません。以前と作品づくりの本質は変わっていませんが、最近WSの導入部分が変わったので、みんなで協同してつくりあげる稽古内の時間やお互いの関わり方や言葉の交わり方は、以前と違うと思います。稽古で煮詰まったときに腹を割って話ができるようになってきている感じがします。稽古初めにたくさん言葉を交わすような導入部分をつくっているのも、何か起きた時に建設的な話ができる関係性を築けていると思います。

岩崎:ほぼ、田上さんと同じ感覚です。アウトリーチでやっていることと劇団でやっていることは同じです。劇団では稽古が始まって2週間程度、作品の題材をテーマにWSをやっています。作品像がおぼろげに見えてくるような時間を設けていて、この時間がとても大切だと思っています。劇団内で話し合いはあまりしないのですが、自分が演技として何を働きかければ相手が動いてくれるかを考え、それを受け取ったら必ず相手に返すというWSの原則論で、劇団のものづくりも動いています。プロデュース公演の時も同様です。この原則は演劇に留まらず、人が集まる場所では有効だと思っています。そのことに気付いてから学校でのアウトリーチにも、いろんな方と出会うことにも躊躇がなくなったというのがここ10年くらいで感じることでですね。

田上:作品づくりの稽古初めに台本がないときは、どう作品に向かうかということもあるので、演劇を遊ぶために、どんな道具をどう使うのかをみんなで共有する時間をとります。例えば、ジャングルジムで遊ぶためにジャングルジムの登り方をみんなで考えるような。

岩崎:演出家が言っていることをどう聞いて、何に発展させるかを俳優も考える。この関係性がアウトリーチに近いと思います。子どもたちの想像力というのは、いろいろな経験を積んでいることとは関係ないんだと思う瞬間があるのですが、そこは作品づくりと同じですね。アウトリーチの最

中、グループの関係性が良くないときも演劇を作っているときと同じで、誰かが仕切ろうとすると途端に上手くいかないとか。

田上:セリフを言うのが恥ずかしいとか、クラスでもあまり発言しないという子がアウトリーチでセリフを言えたりすると感動するように、俳優も同じで、未知なものに踏みこむ第一歩のときにドキドキするんだなど、自分の演劇に対する醍醐味





や興味を再確認することがあります。俳優は台本を渡せばすぐ読めるようにトレーニングされているからできますが、それでも難しいときはやってみても上手くいかない。それでもこれでいこうと決めた時の1歩目は、腹を決めたなどと思う瞬間に、小学生もプロの俳優も怖いものに足を踏み出す時の力強さというか、人の心を揺さぶるものがある感覚が、アウトリーチも作品づくりも同じだなと思います。

岩崎:それでいうとこちらの言葉も試されますよね。この言葉でこの人は動いてくれたんだと思う感覚があるので、そこは我々も試されている、そういう場に立たされているんだなと思います。

田上:最近、1歩目を踏み出す時にわざとフォローを入れないときがあります。いけるかな、いけなかなというときに親切にしすぎると、何も感じず受け身になってしまって意味がない。

岩崎:まさにそれが演出家と俳優の関係性ですよね。こちらに全部を聞いてくる俳優はダメですよ。

田上:どうしたらいいですか?って聞かれるのは困りますよね。考えるのはそっちでしようと思う。

岩崎:そうです。だから相手が小学生でも僕は同じように言いますよ。やっぱり演劇の創作現場での関係性とアウトリーチでの小学生との関係性は同じですね。

田上:WSの参加者に対するアーティストの言葉のかけ方は、作品づくりをするアーティストの人柄や作品の本質のようなものが、かなり出ていると思いますね。

岩崎:WSに参加する大人も子供も、自分で発見することが楽しいのだと思う。人に与えられたことは楽しくないでしょ。WSの現場は常に自分で発見する楽しさが基本となって動いていると思いますよ。

大垣:アウトリーチ中に自分で発見できたという体験は、まさにその瞬間、子どもたち個人の中でサプライズが起こっているように思います。サプライズとは、本人の中で「見つけた」とか「出来た」と思えた瞬間の喜びのような感覚です。このサプライズが起こる可能性があるプログラムには、サプライズを起こす余白のようなものがあるように思えます。この余白とは、子どもたちが発見をする時間の余裕であったり、他者の意見を取り入れる余裕であったり、周りを見て自分を受け入れる余裕であったり、様々だと思われませんが、このプログラムの余白についてどのようにお考えですか?

田上:サプライズが起こる余白を残すというのは、楽しいことなので必要なのですが、アーティストにとってはとても怖いことなんです。余白がないプログラムの方が、僕にとっては楽なプログラムです。ただ僕は、自分の手法に慣れたくないから怖いところを必ず残しています。サプライズを起こすべくして起こすというよりも、プログラムの余白をどう扱おうとサプライズに繋がるのかということが重要だと思います。ギチギチの鉄壁のディフェンスを組むのは、とても洗練されているように見えますが、アーティストの感覚としてはその手法に飽きるんじゃないかと。誰に対しても完璧にいくでしょという満足感を得



るためにWSをやっているわけではないですから。

岩崎：他者と違うという実感が子どもたちから出てくる。そのことが面白いからやっていますよね。

田上：そこが楽しみだし、子どもたちってすごいんだと信じたい気持ちが残っていますから。

岩崎：その違いが、年齢や地域によっても変わってくるので、我々も子どもたちが発見したものに対して驚きたい。

田上：指導ではドキドキできないはずで、サプライズが起こりづらい。アウトリーチは、子どもたちに与えすぎないことが重要だと考えています。

岩崎：参加者もアーティストも含めて、絶えずWSの全体像が流動的だから面白い。誰かが自己中心的に何かを決めてしまうと面白くなくなります。それは作品づくりも同じです。この本でこうやってと言われたときの俳優の退屈そうな稽古と同じですよ。ある種の自由度が保障されていないといけない。何かを達成する目的だけでやっていると面白くない。規律を優先しないで、総合的に全体像が見えることが楽しい。目的は共有しているけれど、それは一般社会でいうところの規律とは全く違います。規律に寄りかからず、目的に向かって全体が何かを共有している、それは生産的なことですが、お金儲けに繋がることではない。そういう瞬間が喜びだったりしますよね。

大垣：自由度の高い作品をつくっているアーティストが、WSになると自由度が低く、達成を目指すような、準備されている正解に向かっていくようなプログラムを実施している場合、その人の作品の方向性とWSの内容が乖離しているように思いますが、それはなぜでしょう？

岩崎：ご自分の作品をつくるときには気づいているのに、WSをやるから規律だとか達成だとかを気にするのは、本人の中で誤変換が起こっているように思います。

田上：誤変換を起こしているなら、本人がWSの参加者になるとそのことに気が付けると思います。

岩崎：全体で何か感覚を共有していることを楽しいと思えない人が、WSをやらなければならないとしたら、その人はやらない方がいいと思います。例えば、WSで使用するテキスト(台本)の扱い方もA4サイズ1枚の分量ならじっくり取り組みます。その時に同じことの繰り返しではなく、発展していくことが可能で、その経過の中で子どもたちが発見していくことが面白いわけですよ。テキストの分量が多くなるとやりっぱなしで、発見する前に終わってしまって参加者に何も残らないでしょう。

大垣：これまでの経験で違和感のあったアウトリーチの現場を教えてください。



田上：アウトリーチ終了後のフィードバックで、先生方が教育寄りの見方で指摘をされたときに、帰りの車の中でコーディネーター(ホール担当者)が、次回は先生の指摘通りにやってもらえますか？と言ってこられた。みんなで長いものに巻かれていくような感覚だったことにすごく違和感を覚えました。コーディネーターがアーティストを現場へ連れていく際の、一番大事な根幹が覆されたような気がしました。僕も若



かったので、若いなりに説明できる言葉を持っていないければいけなかったとも思います。ただ、アーティストが若いからといって、簡単にそういうことを言ってしまうくらい、学校の評価が気になりすぎるコーディネーターの価値基準は、ちょっと違うと思います。ワークショップという言葉の認知度が上がり、それを研修する場や講座もたくさんあるのに、とても不幸な状況がまだありますね。

岩崎：インリーチで人が集まらないことに平気でいられる担当者に疑問を感じます。定員15名のところ3人しか集まりませんでしたと言われるのはつらい。がっかりするのと同時に3人に対する責任感はとても大きくなりますから、アーティストはとても傷つきますよね。責任を持って人を集めてほしい。あとは、担当者と話が噛みあわないときや、心がすぐに折れる担当者と仕事をするときはツライですね。担当者が僕たちを信頼してくれているときは問題なくできますが、試されていると思ったら絶対できないです。

田上：仕事を丸投げしてくる感じは、僕らにはとても敏感に伝わります。低姿勢な人でも完全に丸投げしてくる人と、ちゃんと一緒に走ってくれている人というのは体感としてわかります。

岩崎：担当者との信頼関係は、相手の仕事をリスペクトできたときに築けます。担当者の方が、こちらの作品性や仕事ぶりを見てプラスに感じてくれていれば、いいタッグが組めると思います。僕の作品を評価していない人とは組めないですよ。

田上：アウトリーチに関して勉強しようと思っているか、知らないなりに知ろうとしているかどうかは、大切だと思います。専門性に対する意識の持ち方は重要だと思うので。

岩崎：誤魔化しではなく、その人の言葉で話してくれる人がいい。知ったかぶりをされると嫌ですね。

田上：アーティストもナイーブなので、尊厳を感じないと一緒に仕事をできない。

岩崎：まったくその通りですね。



アウトリーチ実施校データ

○学校の授業枠で実施

平成25年度 モデル事業

参加団体	参加ホール	アウトリーチ講師	学校名	対象学年	参加人数(人)	参加合計(人)
上田市	上田市交流文化芸術センター(2014年10月開館予定)	内藤 裕敬	中塩田小学校	4年生	95	95
(公財)豊田市文化振興財団	豊田市民文化会館	岩崎 正裕	明和小学校 ※ア	1～6年生	21	112
			中山小学校	5年生	91	
(公財)高知市文化振興事業団	高知市文化プラザかるぽーと	多田淳之介 田上 豊	行川中学校	1～3年生	23	55
			第六小学校	4年生	32	
【備考】 ※ア:連続2日間実施した。			小学校 4校 中学校 2校 合計 6校			262

※団体・ホール名、学校名は実施当時の名称

平成26年度

参加団体	参加ホール	アウトリーチ講師	学校名	対象学年	参加人数(人)	参加合計(人)
株式会社地域文化創造	茅野市民館	岩崎 正裕	永明小学校	5年生	94	157
			北山小学校	5年生	27	
			米沢小学校	5年生	36	
NPO法人コミュニティ アートセンタープラッツ	豊岡市民プラザ	田上 豊	資母小学校	5、6年生	21	80
			豊岡小学校	4年生	59	
【備考】			小学校 5校			237

※団体・ホール名、学校名は実施当時の名称

平成26年度リージョナルシアター事業報告書

発行 ————— 一般財団法人地域創造

編集 ————— 一般財団法人地域創造

発行日 ————— 2015年3月

